

1. 福岡市における水環境中の PPCPs の存在実態と季節変動

環境科学課 宇野 映介・豊福 星洋・戸渡 寛法
松尾 友香

第 23 回環境化学討論会

近年、医薬品や日用品由来の化学物質（PPCPs）が水環境中や下水処理水に存在することが報告されており、環境影響が懸念されている。そこで、今回福岡市における水環境中の PPCPs の存在実態調査を行い、季節変動の解析を行った。

存在実態調査の結果、本調査対象の PPCPs 30 種類すべてがいずれかの地点で検出され、検出最高濃度は Caffeine の 1200ng/L であり、各 PPCPs の検出濃度は数～千 ng/L のレベルであった。Caffeine, DEET, Bezafibrate, Clarithromycin, Sulfamethoxazole の検出頻度は、他の PPCPs に比べて高く、ほぼすべての地点で検出された。

また、下水処理場の放流口下流に位置する金島橋において、季節変動を解析した結果、DEET（昆虫忌避剤）、Diclofenac および Indometacin（解熱鎮痛消炎剤）は夏に、Clarithromycin（抗生物質）、Sulfapyridine（抗菌剤）、Carbamazepine（抗てんかん薬）、Diltiazem（Ca 拮抗薬）、Diphenidol（抗めまい剤）は冬に、Bezafibrate（高脂血症治療薬）Dextromethorphan（鎮咳薬）、Propranolol（降圧剤）は春に高濃度に検出される傾向があった。